

令和 2 年 7 月 3 日現在

機関番号：14403

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K04776

研究課題名(和文)文学の読みの「深い学び」を駆動する「認知的道具」に関する理論的・実践的研究

研究課題名(英文)Theoretical and practical research on "cognitive tools" that drive "deep learning" of reading literature

研究代表者

住田 勝 (SUMIDA, MASARU)

大阪教育大学・教育学部・教授

研究者番号：40278594

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：文学テキストを教室で読む際に、子どもたちの読みのパフォーマンスを良好に変容する可能性のある「認知的道具」の理論的記述を充実させた。例えば「題名」、「冒頭・結末」、「人物・キーアイテム」、「プロット」、「語り」等々が、物語をどのように構成し、読み手が物語テキストを楽しむときに、どのように機能し、その読みを充実させるのかという点について、理論的仮説を積み重ねることができた。その上で、そのいくつかの「認知的道具」に焦点を当てた、具体的な国語教育実践を実験的に行い、読みの授業としての有効性を一定検証することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

文学テキストの読みの学習指導は、指導事項として取り上げられた要素と、実際の読みのパフォーマンスとの関係が必ずしも明確ではなく、それ故、単元の狙いとして掲げた目標の系統的な位置づけが十分に行えないという課題を常に抱え続けてきた。この研究が資するのは、単元のねらいとして、焦点を当てるターゲットとしての「認知的道具」の機能を明らかにし、応用の可能性を探り、その射程を実践的に確かめていくための基礎的な視点を与えることにあるだろう。

研究成果の概要(英文)：When reading literary texts in the classroom, we have enriched the theoretical description of "cognitive tools" that can positively alter the reading performance of children. We have considered how the story is organized by, for example, "title", "beginning and ending", "character/key item", "plot", "narrative" and so on. We could also improve the theoretical hypothesis about how these "cognitive tools" work and enhance their reading when the reader enjoys the narrative text.

On that basis, we were able to experimentally carry out specific Japanese language teaching practices focusing on some of the "cognitive tools" and to verify the effectiveness of the reading as a class

研究分野：国語教育学

キーワード：文学教育 認知的道具 系統的指導

1. 研究開始当初の背景

国語科教育、分けても文学教育の教科内容は、その系統的学習指導が困難で、教材を読むことがあっても教材を重ねながら、つなぎながら積み重ねることが困難であった。その背景は、文学テキストを構成するどのような要素が、どのようにテキスト読者に作用し、どのような体験をもたらすのか、という知見の体系的な記述が不十分で、実践的な取り組みの中で、教科内容の系統性として整備されていない状況にあった。

そんな中で、新学習指導要領の基本構造として打ち出されてきた、三つの学び、すなわち「主体的な学び」、「対話的な学び」、「深い学び」の問題は、国語科教育の今後の展開にとって致命的な問題を孕むことになるという深刻な危惧が生まれた。それは言うまでもなく、どのような学びが国語科学習における「深い学び」になるのかという問題が、おそらく他教科に比べて最もイメージしにくいことに依拠する。

すでに述べたように、国語科教科内容は、その系統や構造において知見や議論が十分に積み重ねられているとは言えず、その意味で、「何を教えるのか」問題が未解決な状況にある。そうした状況で、三つの学びによる授業改善を現場サイドで進める時に生じることが予想されるのは、もっぱら学習者の主体的学習参加を外形的に担保する工夫や、「対話的な学び」のデザインとして提案される様々なグループワークを取り入れることによって、外形的な対話性を担保する工夫に、学校現場の教職員の強い関心が向いていくことになるということである。すなわち、「深い学び」の探求を棚上げにすることである。限られた時間的資源、人的資源を、目下の進行しつつある教室の運営に投入する戦略としては当然である。その正体をいくら時間をかけてもつかめない国語科の学びの「深さ」など捨ててしまっていて、とにかく外形的に子どもたちの「やる気」と、生き生きとした「交流」の姿を教室に整えることに、誠実な学校教員たちは全精力を傾けることになる。

畢竟、国語科教科内容の探究は、これまで以上に顧みられることなく、国語科の学習指導によってこそ錬成される言葉の力は、その内実を急激に空洞化させることが進行するだろうことが予想された。

2. 研究の目的

本研究は、そうした課題状況を解決するための基礎的な研究として、文学テキストを構成する要素（例えば、「題名」や「冒頭」表現）が、読書行為の文脈において、どのように振る舞い、読者に作用し、読書行為を推進する力となりうるのかを検討することを目指す。つまりそれは、文学テキストを読む際に、読者が利用する文学テキストの構成要素に由来する「認知的道具」のあがり出すことであり、それぞれの「認知的道具」がどのように機能するのかを、その有効範囲をも含めて明らかにすることを狙いとしている。

またそうした、文学テキストを読むための「認知的道具」についての理論的フレームを構築するとともに、そうした「認知的道具」に焦点を当てた授業実践を通してもたらされる文学の授業としての有効性を検証することを目的とした。

3. 研究の方法

小学校、中学校の国語教科書に所収された文学テキストを中心に、物語構造分析を行い、「認知的道具」として汎用性が高く、反復して現れるものを取り出し、系統的に整理する。そして、そうした「認知的道具」が、それぞれのテキストを読む際にはたらくメカニズムを理論的に記述し、相互の関係性や、系統性について理論的フレームとしてまとめる。

そして、そうした「認知的道具」を意識的に使ってみる場としての国語学習指導のデザインのための基本的視座を得るために、小学校中学校の実践者と協働しながら構築し、授業実践のパフォーマンスを行い、その有効性を検証する。

4. 研究成果

「題名」、「冒頭・結末」、「人物・キーアイテム」、「プロット」、「語り」の5つの柱を立て、具体的な国語教材における働きと、作品間を繋いだ時の系統的な教育効果について、具体的な繋がりを明らかにすることができた。例えば、物語の「題名」は、「人物型」、「キーアイテム型」、「セリフ型」の三つのタイプが存在する。それぞれのタイプは、それぞれ異なった方法で読者が今から始まる物語への期待を形成するのに役立つ機能を有していた。「人物型」は、自ずと物語の中心人物への注目を励起し、人物設定の中に、物語を結末まで駆動する中心的な課題を見出す傾向を生み出していた。「キーアイテム型」の場合は、そのアイテムの役割をはじめから注意しながら読む姿勢を形成し、「セリフ型」は、その「セリフ」が誰によって、どの場面で発せられるかを身構えながら読み進めることを促すので、物がたりの結節点や山場を見逃さない働きかけを持つことがわかった。

「冒頭・結末」の問題領域では、次のような発見がもたらされた。「不安定」な課題状況から始まり、それを解決して「安定」に至る「欠如充足型」の物語（「おとうとねずみチロ」や「お手紙」等）。また、「安定」した日常から始まり、「不安定化」することでドラマが動き始め、冒険の末再び「安定」を取り戻す展開の物語（「スイミー」、「ちいちゃんのかげおくり」、「海の命」等）。そうしたタイプを措定することで、教材と教材のつながりを意識させたり、意図的な比較読みが計画できるようになる様々な提案が可能になった。

「人物・キーアイテム」については、特に「脇役」への注目が促されることによって、物語を大きく展開させていくキーパーソンとしての「脇役」を意味づける戦略的な読みが、多くの学習者によって有益な結果をもたらすことが見えてきた。また、中心人物と対人物との間に、なんらかの設定上の繋がりが仕掛けられることが多く、それを意識した時、子どもたちの物語理解のレベルをぐっと変えていくことができる可能性が見て取れた。

「プロット」については、「さんびきのこぶた」に典型的な「連続反復型」のプロット構造、それに対して「A B A'型」と名付けた、反復されたユニットが連続ではなく、飛び飛びに配置されたタイプのプロット構造の二つを基本構造としてみた時、子どもたちが読み進める様々な教材を系統化することが可能になった。

今回の研究課題取り組みで、仮説フレームには取り上げながら、十分に探求できなかったのが、「語り」の問題である。「物語」を構築された仕組み、仕掛けの面から見ることによって、「物語言説（物語構造）」を捕らえる際の「認知的道具」にはかなり光を当てることができたが、「語り」の問題は、そうした「物語言説」を駆使して、読者になんらかの「物語る」行為を行った語り手の「行為」が問題になる領域である。いわば「物語行為」としての「語り」をどのように「認知的道具」として取り立て、学習可能な形に仕上げていくのか、という問題が、今後の重要な課題として残された。

この問題が重要なのは、物語学習が、物語を楽しく読む力の形成、にとどまることなく、必ず、「物語を語りなす」能力の獲得に関する問題提起と関係してくるからである。子どもたちが物語学習を通して出会い、内面化してきた「物語る」際機能している「語りの人的道具」を、物語を読む過程で利用し、やがてその人自身が自分自身を語りなす際にそれが発現することによって、それこそが、国語科学習指導研究において目指す、文学テキストの読みの能力の構造と系統の完成形なのである。今後の課題としていきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計12件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 11件）

1. 著者名 住田勝	4. 巻 87
2. 論文標題 「物語る力」を育てる；文学的問題解決に資する資質・能力の構想	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 国語科教育87集	6. 最初と最後の頁 8-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 森美智代、倉盛 美穂子、太田 直樹	4. 巻 8
2. 論文標題 小学校入門期の授業における教師と子どもの相互作用の実態：国語科と算数科授業で重視される目標の違いに着目して	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 初等教育カリキュラム研究	6. 最初と最後の頁 49-60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） info:doi/10.15027/48910	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 森美智代	4. 巻 83
2. 論文標題 ディシプリン重視の立場から「教科の本質」を再考する	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 国語科教育	6. 最初と最後の頁 12-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20555/kokugoka.83.0_12	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 森美智代	4. 巻 7
2. 論文標題 自己と他者の対等性・相互性を越えた「聞くこと」の教育の目標論：レヴィナスによる問答法批判を中心に	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 福山市立大学教育学部研究紀要	6. 最初と最後の頁 117-126
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） info:doi/10.15096/fcu_education.07.09	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 寺田守	4. 巻 83
2. 論文標題 コンピテンシーを育成する読むことの学習指導	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 国語科教育	6. 最初と最後の頁 9-11
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.20555/kokugoka.83.0_9	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 住田勝	4. 巻 87
2. 論文標題 「物語る力」を育てる；文学的問題解決に資する資質・能力の構想	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 国語科教育	6. 最初と最後の頁 8-12
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.20555/kokugoka.87.0_8	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 森 美智代	4. 巻 7
2. 論文標題 自己と他者の対等性・相互性を超えた「聞くこと」の教育の目標論 レヴィナスによる問答法批判を中心に	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 福山市立大学教育学部研究紀要	6. 最初と最後の頁 117-125
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 森 美智代・磯貝 淳一	4. 巻 14
2. 論文標題 日本語書記史を観点とする日本語話者の論理意識に関する試論：出来事に対する時系列連鎖型の認識傾向に注目して	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 国語教育思想研究	6. 最初と最後の頁 36-44
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 森美智代	4. 巻 811
2. 論文標題 コミュニケーションの言語化されない部分に着目した聞く力の育成	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 教育科学国語教育	6. 最初と最後の頁 36-39
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 森美智代	4. 巻 6
2. 論文標題 小学校での書写指導に対する教師の指導観の分析: 「国語科指導法」(書写実技)受講者の実態調査	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 福山市立大学教育学部研究紀要	6. 最初と最後の頁 97-106
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 森美智代	4. 巻 83
2. 論文標題 提案3 ディシプリン重視の立場から「教科の本質」を再考する	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 国語科教育	6. 最初と最後の頁 12-14
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 寺田守	4. 巻 45
2. 論文標題 「花はどこへいった」(今江祥智)の教材研究	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 京都教育大学国文学会誌	6. 最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 森美智代, 磯貝淳一, 田中宏幸, 松崎正治, 鈴木恵
2. 発表標題 日本語書記史からみた『宇治拾遺物語』の授業化の視点 - 学びのプロセスと日本語書記史を統合する学習材の開発 -
3. 学会等名 全国大学国語教育学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 磯貝淳一, 森美智代, 鈴木恵, 田中宏幸, 松崎正治
2. 発表標題 日本語書記史からみた『宇治拾遺物語』の教材的価値: 学びのプロセスと日本語書記史を統合する学習材の開発
3. 学会等名 全国大学国語教育学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 森美智代
2. 発表標題 「聞くこと」の教育における能動性と受動性に関する考察
3. 学会等名 全国大学国語教育学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 森美智代
2. 発表標題 コンピテンシーと国語科教育 ディシプリン重視の立場から「教科の本質」を再考するー
3. 学会等名 全国大学国語教育学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 黒川麻実・山田直之・大坂遊・森美智代
2. 発表標題 研究×教育×社会貢献を架橋する 場 は誰がどのように創るのか
3. 学会等名 中国四国教育学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 森美智代・倉盛美穂子・太田直樹
2. 発表標題 小学校入門期における国語科・算数科の課題
3. 学会等名 初等教育カリキュラム学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 住田勝
2. 発表標題 読む力の系統性を意識した「ちいちゃんのかげおくり」の教材研究試案：「スイミー」「お手紙み」とのつながりを手がかりとして
3. 学会等名 あまんきみこ研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 住田勝
2. 発表標題 物語る力」を育てる；文学的問題解決に資する資質・能力の構想
3. 学会等名 全国大学国語教育学会（招待講演）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 森美智代ほか	4. 発行年 2018年
2. 出版社 第一学習社	5. 総ページ数 32
3. 書名 1日10分言語力ドリル入門 聞く・話す	

1. 著者名 住田勝ほか	4. 発行年 2019年
2. 出版社 溪水社	5. 総ページ数 206
3. 書名 小学校「物語づくり」学習の指導：実践史をふまえて	

1. 著者名 羽野 ゆつ子、倉盛 美穂子、梶井 芳明	4. 発行年 2017年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 208
3. 書名 あなたと創る教育心理学	

1. 著者名 全国大学国語教育学会編	4. 発行年 2018年
2. 出版社 東洋館出版社	5. 総ページ数 82
3. 書名 国語科教育における理論と実践の統合	

1. 著者名 全国大学国語教育学会編	4. 発行年 2018年
2. 出版社 東洋館出版社	5. 総ページ数 83
3. 書名 全国大学国語教育学会・公開講座ブックレット 国語科の授業づくりと評価を考える	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	森 美智代 (MORI MICHIO) (00369779)	福山市立大学・教育学部・准教授 (25407)	
研究分担者	寺田 守 (TERADA MAMORU) (00381020)	京都教育大学・教育学部・准教授 (14302)	
研究分担者	渡辺 貴裕 (WATANABE TAKAHIRO) (50410444)	東京学芸大学・教育学研究科・准教授 (12604)	